

春 告 草

第 90 号 平成 30 年 1 月 17 日 進路指導部発行

センター試験実施される

平成30年度大学入試の幕開けとなるセンター試験が1月13日、14日の2日間にわたって行なわれ、本校からは6年生149名が5会場に分かれて受験した。

試験会場はすでに第86号で報じた通り、東京学芸大学(60)、一橋大学(42)、津田塾大学(29)、明治薬科大学(16)、東京経済大学(2)の5大学(かつこ内は受験者数)。以前は、現役受験生には同一の試験会場が学校ごとに割り当てられていたが、3年前より受験パターン毎に別々の試験会場になった。

センター受験を終えた6年生は15日に登校して自己採点を行った。自己採点の結果はデータの集計・処理を行い、19日に個人票を返却する。国公立大個別試験の出願期間は1月22日から31日までの10日間。自己採点の結果と志望大学・学部の得点分布状況を見て、最終出願先を決定することになる。

「大学入学共通テスト」実施まで2年。5年生、4年生は新テストを見据えて、思考力、記述力も意識して力をつけていかなければいけない。出題内容やレベルなどの詳細は次号以降、順次掲載していくが、概況を伝えておく。(ベネッセ・駿台による試験概況速報を転載した。)

国語— 評論で図に関する対話の問い、古漢で対話形式の問題文が出題。昨年よりやや易化 —

問題文の分量は全体として昨年と同程度。昨年同様、文章全体の展開や主題を把握する力が求められた。評論で図に関する対話形式での設問が、古文・漢文で問答・対話形式の文章が出題され、全体に「言語活動の充実」を意識した出題であった。昨年よりやや易化。

日本史B— 史・資料読解の必然性が増し、思考力が求められた。難易は昨年並 —

大問数、解答数に変更はなく、日本史Aとの共通大問は例年通り2大問出題された。所与の史・資料を読み取り解釈する力が引き続き重視された。また、第1問のテーマは2年連続で主題学習の「地域と歴史」だった。全体的な難易は昨年並。

世界史B— 文章選択問題が増え、地図などの資料問題は減少。地域網羅性は継続された。難易は昨年並 —

地域網羅性は継続され、周辺地域からの出題も多くみられた。4択の文章選択問題が昨年から大幅に増加した一方で、年代整序問題はみられなかったほか、地図問題の出題は1問にとどまった。また、昨年までみられた日本史と関連させた問題はあまり出題されなかった。昨年同様グラフを読み取って判断する力も求められたが、オーソドックスな内容が中心で、難易は昨年並。大問構成や解答数は変更なし。

地理B— 身近な素材を含めた多彩な資料が用いられ、地理的考察力が問われた。難易は昨年並 —

限られた時間の中で多くの図表を正確に読解する力と、地理的な見方・考え方が求められた。スマートフォンやムーミンなど受験生に親しみやすいものが素材として扱われたほか、比較地誌がこれまでの2か国から3か国の比較となった。一部に難易度の高い問題が出題されたが、全体的に標準的な問題が多く、難易は昨年並。

現代社会— 現代の諸課題の出題が増加。今年も写真問題、趣旨問題が出題された。難易は昨年並 —

大問内や設問内で各分野を融合的に問う問題がみられた。昨年に続き、写真を用いた問題やリード文の内容把握を問う問題が出題された。思考力を必要とする問題や時事的な知識を要求する出題もあったが、基本事項の知識を求める問題が中心であり、難易は昨年並。

倫理— 組合せ問題の数や選択肢の文章量が減少し、標準的な問題が増加。昨年よりやや易化 —

大問構成や出題分野は変更なしだが、解答数が1個減少した。組合せ問題の数や選択肢の文章量が減少し、基本的知識が丁寧に問われた。現代思想ではセンやウィトゲンシュタインの思想が問われた。難易は昨年より易化。

政治・経済— 戦後史の知識を用いる出題が目立った。資料読解に時間を要するが、難易は昨年並 —

「倫理、政治・経済」との共通の設問が4大問中3大問で出題された。基礎的事項を問う出題の中で、知識に基づいて統計資料を読み取る出題もみられた。また、年代整序問題も出題され、教科書の基礎的事項についての深い理解が求められたものの、全体的に基本事項が中心に問われており、難易は昨年並。

倫理、政治・経済— 倫理は基本事項、政経は現代的課題への考察を要求。難易は昨年よりやや易化 —

すべての設問が単独科目「倫理」および「政治・経済」と共通であった。倫理分野では問題量が微減し基本事項の理解、政治・経済分野では基本事項の理解を中心に資料読解が問われた。正答を判断しやすい問題が増加し、全体的な難易は昨年よりやや易化。

数学Ⅰ 数学A— 複数の大問で論証の根拠を考察する問題が出題された。難易は昨年よりやや難化 —

大問数、配点は昨年と同様。問題量は昨年よりやや減少。答えを求める根拠として記号や数学的性質を選択するような出題が複数あり、思考のプロセスを重視する傾向が見られた。昨年よりやや難化。

数学Ⅱ 数学B— 1 ラジアン の定義や微分と積分の関係を問う問題が出題された。難易は昨年よりやや難化 —

大問数、配点は昨年と同様。問題量、計算量は昨年並。全体を通して各分野の基本事項が出題され、第1問では1 ラジアン の定義を問う問題が、第2問では微分と積分の関係が問われた。昨年よりやや難化。

物理基礎— データやグラフから思考させる問題が例年に比べて増加した。昨年よりやや易化 —

典型的な素材を中心に、物理基礎の基本的事項の理解が問われた。与えられたデータから熱容量や金属線の抵抗値の大小関係を問う問題、一定の速度で動く台車から打ち出された小球の運動について思考させる問題がみられた。難易は昨年より易化。

化学基礎— 身近な物質を扱った問題や、知識の活用力を要する問題が出題された。難易は昨年並 —

昨年に引き続き、身近な物質の性質や利用、文字式を選択する問題が出題された。計算問題では、解法によって解答の速さに差がついたと思われる。実験問題や正誤選択問題では、知識の活用が必要な問いが増えた。難易は昨年並。

生物基礎— 昨年同様、基本的な知識とデータの理解を要する問題が出された。昨年よりやや難化 —

昨年と同様、基本的な知識を問う問題がほとんどで、調査結果を分析する出題もあった。一方で、昨年まで出題が続いた計算問題の出題はみられなかった。教科書で扱われている実験に関して、知識ではなく、その実験の意義が問われた。難易は昨年よりやや難化。

地学基礎— 寺田寅彦の随筆から自然現象についての知識を問う出題があった。難易は昨年並 —

大問数は2016年度までの3大問に戻った。図やグラフにもとづく考察問題も例年通り多く出題された。計算問題は1個で複数のステップを要し、手際よく計算することは難しかったであろう。随筆の記述と自然現象を対応させる問題が目新しい。難易は昨年並。

物理— 選択問題に力学の万有引力が出題された。部分点のある問題が増加し、難易は昨年並 —

選択問題は力学の万有引力と原子であった。複雑な計算を要する問題は少なく、思考力を要する問題が多かった。原子では、原子核の崩壊をモデル化した、さいころの模擬実験を題材に探究活動を意識した問題がみられた。部分点のある問題が増加し、難易は昨年並。

化学— 見慣れないグラフで思考力が求められる出題もあったが、昨年より易化 —

陰イオンの質量数、中和滴定など化学基礎の知識のみで解答できる問いがあった。六方最密構造や見慣れないグラフを取り上げた問い、メタノールを用いる燃料電池が出題された。解答数が減少し、標準的な難易の問題も多く出題された。昨年より易化。

生物— 仮説を検証する力が必要とされる問題がみられた。難易は昨年並 —

昨年同様、幅広い出題であったが、問題文の読解に時間を要する考察問題や計算問題が増加した。また、4択の問題が減少し、7択以上の問題が増加した。選択問題で昨年までみられた複数分野の扱いはなくなり、仮説検証に関する思考力を問う問題がみられた。

地学— 文章選択問題が増加。知識と考察力がバランスよく問われた。昨年よりやや易化 —

文章選択問題が増加した。基本的な知識問題のほか、段階を踏んで計算・考察を行うことが必要な問題も複数出題された。昨年選択大問で出題されたアイソスタシーに関する計算問題が、今年は必答問題として再び出題された。難易は昨年よりやや易化した。

英語・筆記— 物語が日誌形式に。内容を大づかみする力が引き続き求められた。昨年は昨年並み —

SF風の物語が日誌形式で出題され、グラフや広告、論説など、素材や目的に応じた読み方が引き続き求められた。主題の特定など全体の概要を問う問題が出題され、現行課程で重視される英文の内容を素早く大づかみする力が、昨年同様求められた。

英語・リスニング— 実践的な英語力に加え、音声と文字情報の同時処理が鍵。難易は昨年よりやや難化 —

音声情報とイラストを含む文字情報（地図）を組み合わせる問題や、討論の場面が出題されるなど、引き続き実践的な英語力が求められた。形式は昨年踏襲ながら、選択肢に工夫がなされた問題、複数情報の整理が必要な問題も多く、昨年よりやや難化。



大学入試ガイド(2)

Road to University

2年後にスタートする「大学入学共通テスト」においては、英語の学力を「読む、書く、聞く、話す」の4技能で測定することを目的に「外部検定」が利用される。連載2回目は、今後さらに利用が加速する「英語外部検定利用方式」について説明していこうと思います。(関連記事は第57号にも掲載)

実施状況 前年比4割増の152大学で実施

「英語外部検定利用入試」元年は3年前の平成27年度になる。日本英語検定協会が上智大学と共同で開発したといわれるTEAP利用入試が上智大学などで行われ、以後英検など外部検定を利用する入試は増加の一途である。

外部検定が本格的に一般入試に導入されて4年目となったが、図1は平成28年度入試からの一般入試における外部検定利用入試実施大学数の推移である。30年度の一般入試で外部検定を利用する大学は152大学、日本国内の全762大学の約20%にのぼる。152大学の内訳は、国公立17大学、私立135大学で、外部検定の利用はますます広がりを見せている。

外部検定の種類 採用状況

英語の検定といえば、英検やGTECを思い浮かべる人が多いと思うが、これ以外にもいろいろな検定がある。平成30年度からスタートする新テストにおいて、「大学入試英語成績提供システム」へ参加申し込みのあった資格・検定は表1のとおりである。このうちリンガスキルは今年の春以降に導入予定である。

図2は30年度一般入試で利用できる検定とその採用率である。英検はほとんどの大学で利用でき、TEAPも大学入試での利用を目的に作られた資格試験であるだけに、採用率も伸びている。GTEC、TOEICはそれぞれ採用率が減少したが、採用校数そのものは増えている。外部検定の利用大学が増え、分母が大きくなった分、採用率は下がってしまった。GTECは3技能の試験を基本とし、スピーキングをオプションにしていること、TOEICは主にビジネス英語を扱っていることが、他の検定試験に比べて採用数が伸びていない理由と思われる。

外部検定の利用方法 利用の仕方は4パターン

一般入試における外部検定の利用方法は現状、「出願資格」「得点換算」「加点」「合否参考・判定優遇」4つのいずれかに分類される。特に多くの大学で導入されているのが「得点換算」である。

図3は一般入試における外部検定の利用方法の割合を示している。「得点換算」は、29年入試で半数を超えていたが、30年入試では63.1%とさらに増加した。

「得点換算」は、級やスコアに応じて、外部検定を大学独自の試験やセンター試験の科目の得点に換算するものである。受験生としてはある程度の得点が担保されるので、英語以外の科目に力を入れることができるという利点がある。

一般入試で外部検定が利用され始めた2、3年前は「得点換算」といっても満点換算、いわゆる「みなし満点」し

図1 外部検定利用入試(一般入試)実施大学数の推移

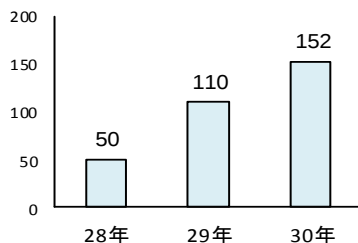


表1 大学入試英語成績提供システム参加申し込みのあった資格・検定試験

資格・検定試験名称	資格・検定試験実施主体名称
ケンブリッジ英語検定	ケンブリッジ大学英語検定機構
リンガスキル Linguaskill	ケンブリッジ大学英語検定機構
TOEFL iBT	Educational Testing Service
IELTS	IDP IELTS Australia ,ブリティッシュ・カウンシル
GTEC	ベネッセコーポレーション
TEAP	日本英語検定協会
TEAP CBT	日本英語検定協会
実用英語技能検定(英検)	日本英語検定協会

図2 外部検定 各大学での採用率(上段29年、下段30年)

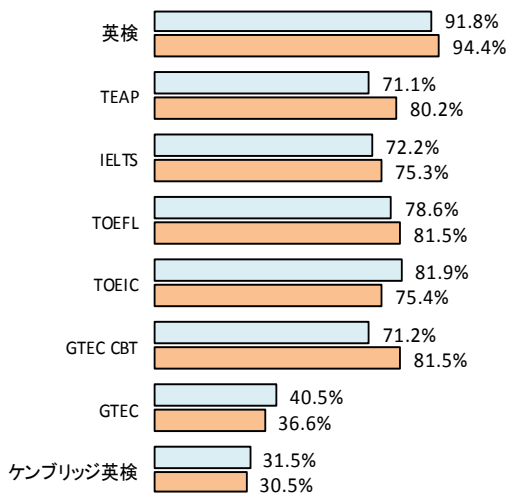
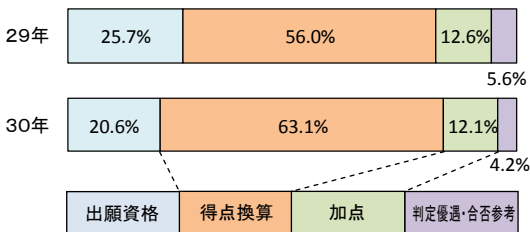


図3 一般入試での外部検定の利用方法



か設定していない大学が中心だったが、昨年から、「英検 2級で80点、準1級で100点」のように細かく段階をつけて換算する大学が増えてきた。30年度入試では「得点換算」として利用する入試のうち58.7%が段階的に換算を行うとしている。表2は明治大学経営学部外部検定利用入試の得点換算の例である。

「加点」は受験した英語の成績に上乗せするという形式だ。これも級やレベルに応じて段階的に加点するというケースが増えていて、30年度入試では「加点」を行う入試の76.8%で段階を刻んだ利用方法を採用している。

英語学力の採用レベル

一般入試で求められる外部検定のレベルを図4に示した。各検定の級・レベルをCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）のレベルにあてはめると、29年度入試ではB2（英検準1級）、B1（同2級）、A2（同準2級）の各レベル（低い方からA1→C2）が約3分の1ずつという割合だったが、30年度入試ではB1の割合が35.1%→43.2%と増加し、逆にB2は33.5%→22.7%と大幅に減少した。利用の最低基準が優しくなったことになる。

基準易化の理由は、3点あげられる。

1点目は、段階別の換算・加点の設定がある。「みなし満点」のみ設定していた大学が段階別の換算を導入したことで、基準が易しくなった。

2点目はこれまで外国語、国際関係など高い語学力を要求する学部・学科を中心に実施されていた外部検定利用入試が、より広範な学部・学科で実施されるようになったこと。これにより、利用できる英語レベルを下に広げた大学が増えた

3点目は新規実施大学の影響がある。はじめに述べたように新規実施大学は42校増えたが、これらの大学が比較的低い基準で導入した影響である。

図4は外部検定利用入試の実施状況を学部系統別にみたものだが、外国語、国際関係学はもちろんとして、両系統以外の分野での導入が目立つようになってきた。

「レベルが下がった」と言うと聞こえは悪いが、利用しやすくなったわけだから、受験生としては歓迎して良いだろう。

AO・推薦入試での利用状況

30年度入試では762大学中335大学（文部省管轄外の大学校も含む）、全体の44%が推薦・AO入試で外部検定を利用した。設置者別にみると国立38大学（34）、公立24大学（21）、私立273大学（259）（かっこ内は昨年度数）となっており、いずれにおいても昨年度の数値から増加している

表2 明治大学 経営学部 外部検定の利用

①出願および「外国語」試験の免除に必要なスコア（最低点）

試験の種類	総合スコア	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検	2級 or 準1級 or 1級の 2200	530	530	530	530
TEAP	230	60	60	45	45
TOEFL iBT	57	13	13	12	12
IELTS	4.5	4.5	4.5	4.0	4.0
TOEIC (L&R+S&W)	980	325 L&R	335 680	140 S&W	130 280

②20点加算に必要なスコア（最低点）

試験の種類	総合スコア	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検	準1級 or 1級の 2310	540	540	540	540
TEAP	260	65	65	50	50
TOEFL iBT	64	14	14	13	13
IELTS	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5
TOEIC (L&R+S&W)	1090	375 L&R	385 765	150 S&W	140 300

③30点加算に必要なスコア（最低点）

試験の種類	総合スコア	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検	準1級 or 1級の 2550	610	610	610	610
TEAP	280	70	70	60	60
TOEFL iBT	71	15	15	14	14
IELTS	5.5	5.5	5.5	5.0	5.0
TOEIC (L&R+S&W)	1180	405 L&R	415 845	160 S&W	150 320

図4 外部検定利用入試で求められる英語レベル

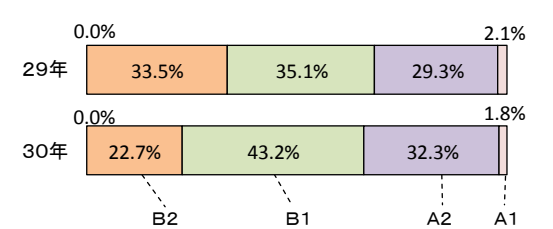


図5 学部系統別 外部検定利用入試実施状況（上段29年度 下段30年度）

